

☆2月・3月・4月の活動☆

採集観察会のお知らせ

◆第四回 2月19日(日) 10時集合、野津田公園(開発が進んでいます)

集合地点: 神奈中バス停「野津田車庫」(小田急線町田駅西口またはJR線横浜線町田駅中央口下車、町田バスセンター11番「野津田車庫行き」に乗車。20分後終点下車)。No.63/64ではバス乗り場番号を誤印字してしまいました。11番が正しい乗り場です。世話人は小峰光弘 TEL. 0422-22-8647

250円の会費でおでん用意の企画あり、容器とハシを御持参下さい。

例会・総会のお知らせ

◆4月23日(日) 10時集合、大橋区民会館にて(渋谷駅から大橋経由のバスに乗車、「大橋」下車) 世話人は熊田憲一。出欠は同封の葉書にて。

例会・総会(10:00開会・名前・所属紹介, 10:10講演, 12:00撮影・昼食, 13:10総会, 14:10講演, 16:30懇親会, 17:30閉会); 同封の葉書に例会への「出欠」「講演の有無(有の場合は演題, 20分)」「住所」「氏名」「近況」をお書きの上, 3月末日までに「〒221 横浜市神奈川区片倉町199 熊田憲一」宛に発送して下さい。講演多数の場合, 先着順にしますので, 講演予定の方はお早めにお申し出下さい(事務局)。

1989年度事業計画の一部(総会で提案, 要承認)

- 1) 採集会・観察会「八王子城址」: 第1回 5月14日(日), 以後7月, 10月, 2月の日曜日(集合地点など詳細は5月初旬発行の「通信」で案内いたします)。
- 2) 合宿「愛知県」: 7月29日(土)14時; 名古屋鉄道「東岡崎」駅集合。宿舎は「白鷺館」です。車で行く方は宿舎へ直接。7月31日(月)まで2泊3日。申し込み及び詳細は次号にて案内します。宿泊費(交通費は別)は全日程参加で17000円くらい。世話人は板倉泰弘。

谷同例会報告 1988年11月20日(日) 10時~16時 大橋区民会館

司会進行・桑原幸夫、スライド・西野洋一。

(1) 午前の講演

原山紀夫・西野洋一「関東地方の林床の多足類について」。1982~1985年の神奈川県立松陽高校の生物部の定量採集のデータを、7, 8月における種構成と密度という観点での集計を行った。採集地点は横浜市泉区和泉町(40~50m), 山梨県塩山市柳沢峠付近他(800~1400m), 群馬県赤城村(580~1800m)の色々なタイプの林床である。いずれの場所から多くの個体が得られる種があることが分かった。

谷川明男「コオニグモモドキの網と捕虫法について」。長野県菅平高原でのコオニグモモドキの観察結果を発表した。このクモは夜間、草の間に2本の糸から成るV字状の網を張り、その中央にぶらさがる。獲物の接近はその羽音などの振動によって感知し、射程内に入ったものをつかみ捕るものと思われる。

篠原圭三郎「サキブトジムカデ属の属名」。サキブトジムカデ属の属名は*Thalphybius*が用いられているが、近年その属徵が近似の*Ithyphilus*と重なりあってる種が次々と記載されており、それらを検討してみると、この両属を分かつ必要がないと思われる。プライオリティは*Ithyphilus*にあるので、これを用いるのがよいとの結論に達した。

小野展嗣「クモ網の系統」。クモ網に属する11の現生の目の類縁関係については、内

田亭の説が我が国ではもっとも一般的であるが、世界的な視野では、いろいろな学者が、それぞれの観点から多彩な意見を公表している。演者は、それらのいくつかを系統樹で比較しながら紹介し、合わせて私見を述べた。

### (2) 午後の講演

新海明「コガネヒメグモの吐き戻し給餌」。コガネヒメグモの吐き戻し給餌の様子をVTRで紹介した。出のう直後の幼体は母グモの口から吐き戻された「spider milk (クモの乳)」によって育てられ、その後、成長するに従い、母グモと一緒にになり、集団で餌捕獲をするようだった。

西野洋一「ツメナシミドリジムカデとツメジムカデに関する2, 3の知見」。林床に多い2種のジムカデについては、横浜市で季節毎の定量採集により得られた標本をもとに体長の分布を調べた。それぞれについて体長によりいくつかの齢に分けられると思われ、ツメジムカデでは春から初夏、ツメナシミドリジムカデでは夏から秋に新しい世代が出現することが分かった。

### (3) 懇親会

萱嶋先生より、ペナンで見た「光る蜘蛛」の正体の究明が宿題として出されました。

今回で17回目に当たる合同例会皆出席の篠原先生より、活発なムカデは元気が良いのではなく、環境の激変で苦しんでいるのだという話がありました。

参加者、桑原幸夫・篠原圭三郎・西野洋一・原山紀夫(多足類懇談会)。

池田博明・板倉泰弘・稻葉茂代・梅林力・小澤實樹・小野展嗣・萱嶋泉・国見裕久・熊田憲一・小峰光弘・笹岡文雄・佐藤幸子・新海明・高野光男・高橋佳子・高橋登・竹田直子・田副幸子・谷川明男・萩本房枝・松浦祐司・松本誠治(東京蜘蛛談話会ほか)。

### 萱嶋泉先生の喜寿を祝う会の報告

新海明

萱嶋泉先生の喜寿を祝う会が、1988年11月20日午後5時半より東京新宿にあるホテル東京海洋会館で行われました。当日は小雨のパラつくあいにくの天気でしたが、30名余りが集まり盛会となりました。

はじめに日本蜘蛛学会会長の関口晃一先生と談話会運営委員を代表して小野展嗣さんよりお祝いの言葉をいただき、ついで小澤實樹さんの乾杯の音頭で会が始まりました。そして座卓を囲んで中国料理を食べながら、談話会発足当時から萱嶋先生と共に会を支えてくれた松本誠治さん、新海栄一さん、佐藤幸子さん、国見裕久さん、高橋登さん、熊田憲一さん等から次々とご祝辞を頂戴いたしました。暫く会食の後に「萱嶋先生と談話会の20年」と題しましたスライドの上映会となりました。今は中堅の研究者となった談話会メンバーの若かりし頃の写真が写し出されると、歓声が上がったりして、なごやかな雰囲気の中で会は進行しました。

多数寄せられた祝電や葉書の紹介の後で、記念品(万年筆と生花)の贈呈が行われ、最後に萱嶋先生からのお言葉をいただき、午後8時半頃に散会となりました。

本祝賀会を遂行するにあたりまして、出席された会員を始めとして、記念品代やご寄付、差し入れ、葉書による祝辞、祝電など全国の会員の皆様からのご協力を得ました。以下に御芳名を記してお礼とさせていただきます。ありがとうございました。

#### 《出席者》

池田博明 板倉泰弘 稲葉茂代 小澤實樹 小野展嗣 萱嶋 泉 菊屋奈良義(代理)  
国見裕久 熊田憲一 小峰光弘 笹岡文雄 貞元巳良 佐藤幸子 新海 明 新海栄一

鈴木勝浩 関口晃一 高橋 登 田副幸子 谷川明男 長島忠義 蓮沼克巳 林 秀幸  
松浦祐司 松本誠治 山本一博 吉谷昭憲

《記念品代およびご寄付》

浅間 茂 阿佐見正起 石野田辰夫 梅林 力 複方清人 小澤實樹 笠原須磨生  
加藤輝代子 菊屋奈良義 木藤幸雄 日下部光代 佐久間良三 下謝名松栄 須賀瑛文  
菅波洋平 関口晃一 高野ツヤ子 田中穂積 中平 清 長島忠義 福本伸男  
藤井靖浩 古川 渉 八木沼健夫 吉田 哉 米田 宏 渡辺好章

《差し入れ》

下謝名松栄(泡盛り) ホテル東京海洋会館(神山栄一・大城宏喜)(ウイスキー)

《祝電》

大利昌久 菊屋奈良義 斎藤 博

《お葉書による祝辞》

浅間 茂 阿佐見正起 石野田辰夫 磯部達男 梅林 力 複方清人 笠原須磨生  
片岡佐太郎 加村隆英 木藤幸雄 日下部光代 熊田理恵 小林健一 近藤昭夫  
権田重雄 斎藤慎一郎 佐久間良三 佐藤智子 嶋田順一 下謝名松栄 須賀瑛文  
菅波洋平 高橋祐子 田中穂積 千國安之輔 中平 清 西川喜朗 浜村徹三  
林 俊夫 福本伸男 藤井靖浩 古川 渉 松田まゆみ 松山紘一 水沢正明  
八木沼健夫 米田 宏

《会計報告》

収入

会費	6000円
×26名	150,000円
記念品代	46000円
会員より寄付	38000円

支出

会場費	5500円×28名	154,000円
記念品代		32000円
記念アルバム・写真		15000円
葉書代など雑費		14000円
反省会費		5000円

---

収入総合計	234,000円
-------	----------

---

支出総合計	200,000円
-------	----------

皆様のご協力により赤字を出さずに済りなく祝賀会を終了することができました。誌面を借りまして、改めてお礼を申し上げます。

なお黒字分の14000円は談話会の「20周年記念誌」の発行費用として寄付させていただきました。

《 喜寿を祝う会のこと 》

池田博明

関口先生は、こんな風に話された。

”私がクモを始めた昭和13年に既に萱嶋先生はクモの研究をしておられた。それから一貫して萱嶋先生はクモの研究に取り組んでこられた。そして多くの人を育ててこられた。このような息の長さは本当に素晴らしいことだと思う。もう何年も前のこと、Actaの編集で萱嶋先生のお宅に伺った時に見たアシダカグモが、先ほどお聞きしたら、まだ生きているという。クモへの愛情とあいまって、秀でた飼育の才能も持っておられる。”

是非これからもお元気でクモの研究に、後進の指導にあたられますように。”

最近、やっと関口先生の『クモの生活』(昭和27年、同和春秋社)を入手した。新海栄一さんをクモの道に導いたというこの本には当時の最新の研究成果も盛り込まれている。

人から人へと不思議な縁で、みなさんは結ばれている。萱鳩先生をクモの道に導いた事情はいったいどんなものだったのだろうか。萱鳩先生はこんな風に話された。

「私は台湾生まれで、台湾の淡水小学校という小さな学校で学んだ。先生は総勢3人、小学校は1~4年生までと、高等科1年、2年の複式学級。先生が2年生を教える時は他の学年は継り方、3年生を教える時は他の学年は継り方というわけで、生徒はしょっちゅう作文を書くことになる。

虫採りが好きで、よく採集に出かけたが、蝶を探りに行くと、せっかくの蝶がクモの網にひっかかるてしまっている。クモってなんて憎らしいやつなんだという思いを『悪者クモ助』という作文に書いた。すると、先生が「清書してきなさい」と言られた。清書ということは文集に載せてもらえるという意味である。私には8人兄弟がいたが、まだ文集に作文を載せてもらえた者はいなかった。得意になって清書したら、先生は続きを書きなさいという。そのうちに書くことが無くなってしまった。先生、もう書くことがありません。というと、そこで、えらいものだね、先生は「虫カゴにノートと鉛筆を入れていきなさい」といわれた。そこで、ノートと鉛筆を持って、観察に行く。すると、今まで気がつかなかつたことがわかつってきた。クモが隠れた所からツーッと出てきて、網にかかった虫を捕まえにくることなど、だんだんクモが面白くなってきた（KISHIDAIA(47)の業績目録によると、『悪者クモ助（1）』1919年、『悪者クモ助（2）』『悪者クモ助（3）』1920年。なおグラビアの写真には萱鳩先生の兄弟が7人しか写っていない。萱鳩先生にお伺いして、”東京の学校にて勉学中だった兄が一人、写っておりません”と教えていただいた）。

兄が農事試験場の植物病理科に勤務して、紹介してくれた高橋良一先生の所に、それまでに採った標本を持っていった。すると、これは害虫、あれも害虫、今まで一生懸命に採った蝶や蛾は全部、害虫という。ひとつだけ益虫だったのはクモだった。それで、びっくりして『人のためになるクモさん』という作文を書いた（前目録によると、『人のためになるクモさん（1）』1920年、以下1924年まで毎年1篇ずつ、同じ題で作文が（5）まで書かれた。高橋良一氏のことは青木重幸『兵隊を持ったアブラムシ』（どうぶつ社）に書かれている。ア布拉ムシの世界的な学者である。萱鳩先生はクアラ・ルンプール博物館に高橋良一博士の助手として赴任した。萱鳩先生の御教示によると、高橋博士は北大で植物病理を教えられた高橋良直博士の長男。良直氏は宮部金吾博士の弟子で、夫人は宮部氏の妹さんである。宮部氏は札幌農学校の第2回卒業生、クラーク氏の弟子で、新戸部稻造、内村鑑三と同級生）。

クモの名前は高橋先生が岸田久吉先生を紹介して下さって、そこへ標本を送った。さっそく返送されてきたものを見ると、ひとつひとつのクモに名前が付いている。それからますますクモに魅力を感じるようになった。

この小学校の先生は戦後にすぐれた日本児童文学賞を与えられた児童文学賞を授賞した齊田喬さんであった。東京のお宅へ「淡水で教わった萱鳩です」と喜びの電話をしたところ、「カヤシマ君、さあ？ 淡水にはあまり長くいなかったから」という感じで、覚えておられなかった。クモのことを話さなければ駄目だと兄に言われて、「クモのことを教わった萱鳩です」と言うと、電話口で奥さんにたずねておられる。この奥さんはクモが大いに嫌いなのであった。「ほらいたじゃないですか。クモを持ってきた生徒が」と奥さんが言っておられた。そこで思いだしてくださった。残念ながら、先生はそれからしばらくして亡くなってしまった。

談話会の会員の皆様にも学校の先生がたくさんおられますから、熱心にやれば、きっとそ

れに応える生徒がいるものです。希望を失わずに力を尽くして下さい。”

列席のみなさんが祝辞で述べられた談話会の草創期の話はKISHIDAIA(47、萱鳴泉先生古希記念号)に若干書かれている。また、『悪者クモ助』という作文のことは萱鳴泉著『クモの生活』(さ・え・ら書房)にほんの少し出て来る。目下編集中のKISHIDAIA(57)にも草創期の思い出が寄せられる予定。記念品が万年筆というのは良いアイデアでした。万年筆を英語でfountain penといいますが、fountainは「泉」のことですから。 11.23

### 短報

### ヤエンオニグモの毒は効く

貞元 己良

先日、一般の人々に蜘蛛を知って頂く機会があった。その時蜘蛛の毒について説明した際、場所が野外であった為、手ごろな蜘蛛はいないかと探し、軒下にまるまる太ったオニグモ(♀ad)がいたのでそれを採り、右手でオニグモの頭胸部を押え、左手の平に押し付けてわざと噛まし、一般の人々の驚きの声を聞きながら、無毒であることを実演してみせた。しかし、噛ませた時はなんでもなかったが、翌日噛ませた部分は歯型(キバ型)がくっきりつき、約3ミリに渡り赤く腫れ若干痛痒い症状が一日続いた。

その後、談話会の秋の採集会にて町田市の野津田公園へ行き蜘蛛の採集を行った際、体長約10ミリのヤエンオニグモを発見したので素手で捕えたところ、左手人差し指の第一関節付近を噛まれた。噛まれた時の印象としては、バラの刺に無意識で触り一瞬の激痛を覚えた感じであった。蜘蛛を管瓶に入れ、そして何げなく噛まれた箇所を見ているとみると、白く腫れ上がり、その白く腫れ上がった部分が広がって約10ミリ程度になり、蚊に刺された時の痒みとは違い脈搏の動きに合わせるかの様にズキズキと痛みが伝わってくるようになり、その症状は2時間ほど続いた。その後白くなった部分の血液が徐々にもどりはしたが、腫れた状態は続き約二日たった今でも幅約5ミリの円型状に腫れ、小さな刺が皮膚のちょっと下あたりに刺さっているような感じが続いている。

この結果からヤエンオニグモの毒はオニグモの毒より、良く効くことが判明した。

1988.10.25

### おだよりから

◆小澤實樹氏(東京都世田谷区)；毎々お世話さまです。なかなかバラエティーに富んだ、ゆかいでチャメラのあるニュースもあり、いいです。何にしても、まとめてゆくには大変なことです。多忙の中、ありがとうございます。ご自愛下さい。 1988.10.19

先日初めて長崎県平戸島を訪ねました。10月中旬です。ジョロウグモが相当多く目に入り、自然は豊かです。 10.21

◆萱鳴泉氏(東京都日野市)；新海さんが撮影に協力された北海道のミズグモを3頭、養っております。大変に元気で色々と興味深い行動を見せてくれます。 10.21

◆大熊千代子氏(福岡県箱崎市)より；新海さんのミズグモの話、大変面白く拝見いたしました。10月31日から12日まで、インドネシアにクモの観察に行きます。写真も撮ってくれる予定です。 10.20

◆佐藤幸子氏(神奈川県横浜市)；天候が不順なせいか、雨に触れるたびに風邪を引いています。 10.20

◆古沢笑子氏(茨城県下館市)；子供が手を離れば、多少は自分の時間も多くなるかもしれないと思っていたのに、保育園、小学校と用の切れ目がない生活です。最近、自宅の周囲に、やけにコガネグモとジョロウグモが増えたような気がしています。何かの前兆でしょうか？ 2年前の水害の対策で、4mも土地を土もりしてくれることになり、今、移

転地が着々と作られている最中です。生物の移転までは、國も目が行きとどかないようですね。不安です。 10.21

◆片岡佐太郎氏（岩手県盛岡市）；第3師範附属小学校20周年記念で、11月4, 5, 6日上京予定です。今年は春から病人をかかえ、出るに出られず、雨降り続きと両方で何も出来ませんでした。そんなわけで欠席します。お許し下さい。 10.21

◆田中穂積氏（大阪府富田林市）；毎日忙しく動きまわっています。出席できなくて残念です。皆さまによろしくお伝え下さい。 10.20

◆新海明（東京都国分寺市）；ここ1～2ヶ月、富士山（須走）に通っています。なかなか良いフィールドです。宿泊所もありますので、「行ってみたい」という方は是非御一報下さい。 10.22

◆千国安之輔氏（長野県南安曇郡）；出席できませんが悪しからず願います。御盛会を祈っています。 10.22

◆八木沼健夫氏（大阪市東住吉区）；楽しみにしていましたが、今年は都合により出席できません。ご参加の皆さんによろしく、盛会を祈ります。 10.25

◆林 俊夫氏（群馬県山田郡）；大変御無沙汰をしております。当日は、出張が入り参加できません。盛会を心よりお祈り致します。 10.24

◆中平 清氏（高知県吾川郡）；板倉泰弘氏が送って下さったアオグロハシリグモを育て、お陰で雄と雌を得ることが出来、交合の観察が出来（まことに特徴のある行動でした）、卵のうを得ることが出来、現在第二世を飼育中です。来年はゆっくりした気持ちで観察が出来るだろうと、大いに楽しみにしています。いずれ、板倉氏への感謝をこめて、報告文を書くつもりです。 10.24

◆石野田辰夫氏（宮崎県日向市）；1. 九州地区動物生態学会例会（11/5（土））で、コガネグモ属の形態・生態について話をするハメになっています。2. 目下、心の雲に迷えるコグモが各学年に出没し、コミュニケーションづくりに走り回っています。こっちが登校拒否になりたい位です。 10.24

◆小池牧子氏（神奈川県川崎市）；西ドイツ製のクモのペンダント（ガーネット、赤色）、欲しい方いませんか？ この夏、借金までして手に入れたものと同一の物が同じ店で見つかり、あのとき「もうこれしかない」と言われてムリをしたのにと、くやしい思いをしたので、これは絶対一般客の目に入れたくないとばかり、予約しております。私は金欠病で手が出ません。どなたか買いませんか？ たぶん1万7千円位だと思います。オーナーとの交渉したいみたい、輸入品だし、値が変動するのではっきりは言えない。 10.29

◆福本伸男氏（兵庫県揖保郡）；7月下旬に鳥取県のイソコモリの分布を調査し、それをAtypusの原稿に作成中です。 10.29

◆梅林 力氏（東京都杉並区）；現在元気で、展覧会の準備中です。ヒラタグモの腹の中に挑戦していますが。。 11.1

◆笹岡文雄氏（東京都豊島区）；昨年の採集観察会の集計を始めています。個人的にもKI SHIDAIAの20周年記念誌に一筆載せられるように二本立てでやっています。なまけ者ゆえ、うまくいきますでしょうか。 11.2

◆松田まゆみ氏（北海道河東郡）；北海道は雪の降る季節となりました。今年の採集シーズンも早くも終わりです。採集もデスクワークも思うように進まないこの頃です。 11.5

◆板倉泰弘氏（東京都世田谷区）；農大の収穫祭のパネル展（4年生も午前8時半から午後6時までしっかり御奉仕！）の準備や片付けて、ここしばらくクモのことがお留守でし

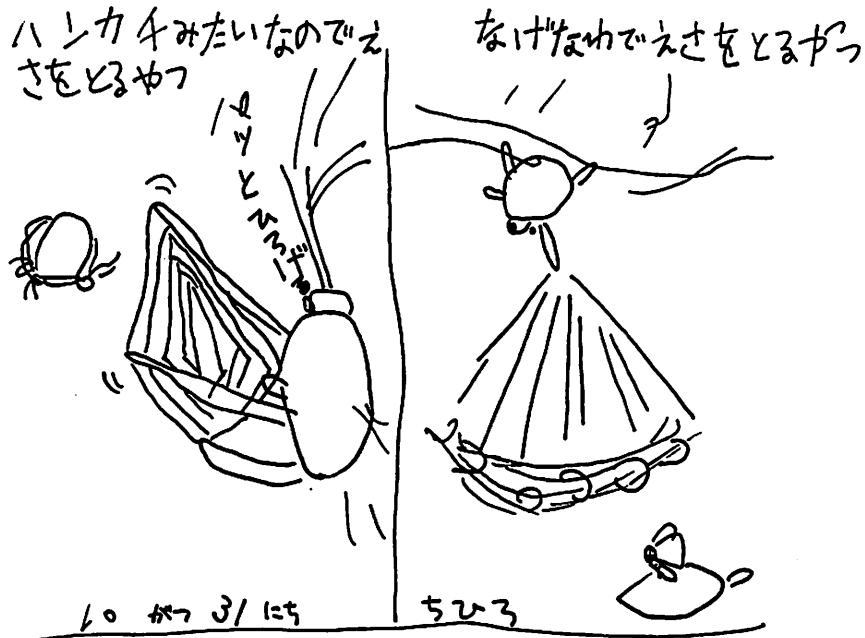
- た。片付きしたい、再開します。 11.6
- ◆斎藤慎一郎氏（神奈川県大和市）；5月にアボック社編集長を退職。劇団MUARIの芝居を今書いています。川崎さいごの自然を守る運動にかかわりながら、虫の方言調査に血道をあげている昨今。野津田に参加できなくて御免なさい。許して下さい。 11.3
- ◆鈴木勝浩氏（埼玉県北葛飾郡）；ジョロウグモの雌が、カムシの仲間を捕食中に雄が交接しているのを観察しました。合同例会の盛会を祈念いたします。 11.3
- ◆貞元巳良氏（神奈川県横浜市）；当日は仕事ですが、萱嶋先生のお祝いにはなんとか出席したいと思っております。場所を教えて下さい。お願ひ致します。 11.2
- ◆浅間 茂氏（千葉県我孫子市）；19日と20日に我孫子で鳥学会があり、それに発表するため、今回は残念ながら欠席致します。 11.7
- ◆近藤昭夫氏（千葉県船橋市）；当日の行動予定は未定ですが、今のところ仕事の都合で出勤することになりそうです。都合がついたら飛び入りで参加したいものです。ジョロウグモとその網、卵と毎日やらめっこしていると言いたいのですが、どうしてどうして雑事多忙で相変わらずヒマなしです。 11.7
- ◆福島彬人氏（秋田県秋田市）；遠い土地ゆえ、会誌の購読のみになるかも知れません。今後いろいろの面でご指導下さいますようお願いいたします。 11.17

#### ~~WATER~~ 昆虫・クモ 動物映像大百科に『昆虫・クモ』篇あり

レーザーディスク（株）の『動物映像大百科vol.7』は『昆虫・クモ』篇です（ディスク番号はSSD98-6046。値段は9800円）。第2面に18種類のクモが収録されています。他に多足類のマンネンヒツヤステ、クモ近縁のイタリアサソリの求愛、ウデムシの雄同士の威嚇行動（なんとアダンソンハエトリの誇示行動にそっくり！）、アゴザトウムシの捕食、クツコムシの歩行、ヒヨケムシの捕食もあります。真正クモ類の内容を紹介しておきます。なお登場するクモは外国種で、捕獲（prey catch）と捕食（feeding）は分けてあります。

トタゲモの餌捕獲、マキツケグモ（=ナガイボグモ）の餌捕獲、アミナゲグモ（=メダマグモ）の網作り・餌捕獲、ナゲナワグモの糸の引き出し・粘球回し・蛾の引き上げ、オレンジオオツチグモの脱皮、トリクイグモの鳥捕食、ジグモの餌捕獲・袋の補修、クロゴケグモの卵のう作り、ヒメグモの吐き戻し給餌・集団捕食・母食い、コモリグモの求愛・マウント・移精、ミズグモの空気運び・補食・脱糞、ハシリグモのハエ捕獲・魚捕獲・補食、エンマグモのハチ捕獲・引きずり込み・食べカス捨て、キシダグモ (*Pisaura mirabilis*) の雄のラッピング・求愛・マウント・移精、ステゴディファスの網・集団捕獲・シロアシダカグモの扉作り・コオロギ捕獲、トゲグモのメスの歩行、ハナグモのミツバチ捕獲。以上の他にミイデラゴミムシの項でブオーンと一発最後っぺをくらって、たじたじとなるショウゴグモ（?）や、ハチの項で南西アフリカのナミブ砂漠のベッコウバチに襲われたシロアシダカグモがダンゴムシのように丸くなって転がって逃げる愉快なシーンがあります。Newlands, G. and E.D. Meillon, 1988. "Struik Pocket Guides for Southern Africa: Spiders". Struik publishers. によると、この「シロアシダカグモ」の正体は、英名は White lady, 科は Sparassidae (Heteropodidaeの別名), 属は Leucorchestris か, Carparachne である。どちらの属かを判別するのは難しいが、前者の方が大型であるとか。

例えばジグモ、ヒメグモ、エンマグモなどは平凡社協賛の英国BBCのライブラリーの映画会で見た覚えがあります。この映像を見た子供が翌日書いた日記の絵を挿絵がわりに紹介しておきます。



なお、加藤輝代子さん出演の「すばらしい世界旅行」（日本テレビ）は11月6日、午後7時半より放映されました。副題は「女性クモ学者と珍妙なクモたち」。外国製のフィルム部分は上記のディスクにも収録されているのと、同じものがありました。例えば、メダマグモやゴミムシに一発やられるジョウゴグモ、ナゲナワグモです。 池田記。1988.11.10

#### NHKテレビ『ウォッキング』に菊屋さん、登場！

1988年11月29日（火）放送分はNHK大分制作の「キムラグモの餌捕り戦術」。解説は菊屋奈良義さん。他のクモと比較しながらのキムラグモの餌捕りの様子、戸蓋の制作、雄の求愛行動（なんとこの雄は2時間かけて数回求愛したのに拒否されてしまった）など、まるまるクモの20分。菊屋さんのキムラグモとの付き合いは38年に及ぶそうですが、みなさんご存じでしたか？ キムラグモときたら、毒針のあるような毛虫は捕らない、大きなヤスデは捕らない、臭いカメムシは放り出す、意にそまない小虫ははじき飛ばす、かんでみて味の悪い青虫は投げ出す、小さなアリは捕獲を止める。その偏食ぶりに驚きました。みなさんご存じでしたか？ 翌日、勤務校の事務の大川さんが「とても面白い番組でしたね」と言って下さった他、社会科の森木先生も「面白いクモがいるもんじゃなあ」（岡山県出身）と話されました。 （池田記。1988.11.29）

#### 新刊紹介

#### 菊屋さんの『自然にドキドキ』

池田博明

菊屋奈良義さんの著書『自然にドキドキ』（白水社。1988.10.28発行。p254。1300円）が出版されました。大分弁を生かした自然との付き合い方の本です。痛快なしゃべくりの魅力にあふれています。

自分をナチュラリストと意識することで、かえって自然を甘くみてしまったりすることがあります。自然とはなんだって？ なにをバカなことを言っているんだ。相手を決めてつきあってみたらよい。謙虚に、虚心に。凡百の自然保護論とはワケがちがいます。きっとあてられて立ち直れぬ人も出ますから、要注意。私も当分菊屋さんの受け売りをしそうです。

**新刊紹介 小野展嗣著「日本産カニグモ科クモ類の分類学的研究（英文）」**

A Revisional Study of the Spider Family Thomisidae (Arachnidae, Araneae) of Japan. By Hirotsugu Ono. 2+2+ii+252頁.

1988年 9月 1日. 国立科学博物館発行.

日本のカニグモの現在知られている種の全種（新種を含む）をまとめた小野氏の研究の集大成です。

市販はされていませんが、国立科学博物館の売店で手に入ります。

(〒110 東京都台東区上野公園7-20 国立科学博物館 TEL. 03-822-0111.)

6500円。50部限り。郵送も可。

**本部会員 談話会をやめようと思っている方へ**

1日8円。この少額な、しかし大きなあなたの援助が、日本の蜘蛛学をささえています。一寸大げさな言い方ですが、年会費は高いようで1日当りにしてみれば、たったの8円にしかなりません。

クモはあきた、面白くなくなつたからやめようと思っている皆さん、1日8円なら一生クモの会を経済的にたすけてやろうと考えることも悪くないのでしょうか。

ついでにもう少しリッチな方は、1日あと19円出して日本蜘蛛学会も養ってやって下さい。会員が減って台所は苦しいそうなので。

ところで、喫煙家の方は、1日3本タバコに火を付けるのをやめればすむ話なんですが。

**日本蜘蛛学会案内**

「日本蜘蛛学会」の入会申し込みは〒274 船橋市三山2-2-1 東邦大学理学部生物学教室内 日本蜘蛛学会事務局まで。年会費は7000円（会誌4冊ほか諸権利有）。

**編集者挨拶 このクモ、なあに？（『ハックルベリー・フィンの冒険』1章より）**

それから間もなく、一匹の蜘蛛が、おらの肩の所へはって上がって来たじゃねえか。それでおらは、その蜘蛛をはじき飛ばしてやったけんど、野郎、蠟燭の中に落っこちやがつてな。あつという間もありやしねえ、チリチリになっちめえやがった。こいつがどうらく縁起の悪いしるしてな、そのうちに悪いことが起こるってこと位は、誰から聞かなくたって分かってらあな。 [野崎孝訳. 講談社. 1976. ハックの言葉]

**1988年クモ学トピックス募集中！**

以前、KISHIDAIで例年「クモ学10大ニュース」という企画をしていました。興味深い種の発見や新しい生態の発見など、論文では分からぬ発見の様子なども書かれており、面白いものでした。そこで次号の通信に同工異曲の企画をしてみたいと思います。次の要領で記事、コメントを送って下さい。会員のみなさん、よろしく。

1) 内容：1988年中のクモ形類に関する新たな発見などニュースを見出しその解説付（100字～200字）で、お寄せ下さい。日時、地名は正確に書いてください。真正クモ目に限りません。自画自賛記事でも報告済み記事でも結構ですが、会員のこれからクモ観察・クモ採集に役立つような内容で、お願いします。一人何篇でもかまいません。

2) 結果発表：ベストテンの形での発表はしません。送られた記事は誌面で紹介します。

お知らせ KISHIDAIや通信に原稿をお寄せ下さい。

会誌編集：谷川明男 〒223 横浜市港北区新吉田町1523 TEL 045-541-2294

通信編集：池田博明 〒258 足柄上郡大井町金手1099 TEL 0465-82-2105

## ジャポニスム展のクモたち

新海 明

1988年 9月23日から12月11日まで東京上野の国立西洋美術館で「ジャポニスム展」が開催された。

ジャポニスムとは、19世紀後半から20世紀にかけて、日本の美術工芸品がヨーロッパにもたらされ、それまでの西洋になかった芸術の可能性を示すことにより、ヨーロッパ芸術界に巻き起こった一大日本ブームのことである。

晩秋の一日、同展を訪れたところ、この展示の中にクモをモチーフとして使ってある工芸品や絵画を数点みつけた。そこで、ここではジャポニスム展でみられたクモたちを紹介しようと思う。

作品番号126 エルキントン社製のジャスミン装飾の花瓶（1882-4：ロンドン、ヴィクトリアン・アルバート美術館蔵）。この陶器には正面の右側下方に円網が描かれており、中心には一頭のクモがいた。このクモはちゃんと下を向いていた。

作品番号165 ティファニー商会の壺（1879：ボルティモア、ウィルターズ・アートギャラリー蔵）。この壺には、餌を口にくわえた（？）一頭のクモが小さく描かれていた。このクモはコガネグモ類のように見えた。

作品番号322 オディロン・ルドン作の蜘蛛（1887：パリ国立図書館蔵）。石版画で描かれたもので、人の顔をもった「10本足」のクモであった。実際にはクモというよりもメクラグモのようだった。クモの背に人面を描くといった象徴性に富んだ作品。

作品番号324 アベレス・メストレス作の「リリアーナ」のさし絵（1908：バルセロナ近代美術館蔵）。インク紙に大きく描かれた円網にハエと子供がかかつてあり、子供はあたかもハエを助けにいくかのようであった。「リリアーナ」の話を私は知らないので、このさし絵の持つ意味がわからなかつた。ご存じの方はお教え下さい。

この展覧会をみたあとで、知人から芸術新潮11月号（1988）にジャポニスムの特集記事があるのをしらされた。この中に、モチーフとしてクモが取り入れられたのは何故かが述べられていたので、ここに紹介しておく。

### 「見出された自然

人間が自然を支配する西欧世界では、鳥獣虫魚はそれ自体で美術の題材となることなどありえなかつた。ところが日本の工芸模様や『北斎漫画』を介して自然に開眼した彼らは、それまで見過ごしてきた小さな自然、例えば蜘蛛までをも作品にとりこむようになった。」（芸術新潮11月号、p 30より引用）

なお、この本の中には上述の作品以外にクモの網をかたどったテーブル作品が紹介されていたので、ついでに以下に述べておくことにする。

A. & H. ルジャンブル工房（？）のテーブル（1880：アメリカ）。マホガニー材・螺鈿・真鍮製。これはテーブルの下方に真鍮製の円網がはめこまれているもので、その円網上にはクモも描かれていた。ただし、この円網は同心円状であった。

## KISHIDAIA パックナンバーについて

KISHIDAIA パックナンバーの販売をいたします。すでに在庫の無いものもありますので、申し込まれる方はご注意ください。また、部数の少ないものについては先着順にいたします。

### 在庫状態

号	残数	号	残数	号	残数
10	なし	26-28	5 ¥200	44	+30 ¥400
11	30 ¥200	29-32	7 ¥400	45	13 ¥400
12	19 ¥200	33	6 ¥200	46	+30 ¥400
13	7 ¥200	34	5 ¥200	47	+30 ¥1000
14	なし	35	8 ¥200	48	+30 ¥400
15	なし	36	17 ¥200	49	16 ¥400
16-17	15 ¥200	37	なし	50	24 ¥400
18	19 ¥200	38	なし	51	19 ¥400
19	16 ¥200	39	9 ¥400	52	12 ¥400
20-21	4 ¥200	40	+30 ¥400	53	10 ¥400
22	13 ¥200	41	+30 ¥400	54	+30 ¥400
23-24	12 ¥200	42	+30 ¥400	55	+30 ¥400
25	なし	43	+30 ¥400	56	+30 ¥400

### KISHIDAIA パックナンバーの申し込み方

葉書に希望のパックナンバーを明記の上事務局までお送り下さい。料金・送料は請求書を同封しますので、到着後確認のうえ郵便振替にてお払いください。

在庫の無いものにつきましてはコピーに応じますが、コピーの発送等につきまして少々時間を頂きます。

事務局：〒221 神奈川県横浜市神奈川区片倉町199 熊田 憲一

### — 訃報 —

東亞蜘蛛学会（現日本蜘蛛学会）創設に力を尽くされ、日本蜘蛛学会名誉会員でもありました植村利夫氏が昭和63年（1988）12月27日、お亡くなりになりました。

当談話会も間接的にではありましたが、たいへんお世話になりました。ここに謹んでお悔やみを申し上げます。

# 会計だより 郵便振替口座 東京 7-74885 東京蜘蛛談話会

会員登録  
会員文領 1988年10月~ (敬称は省略させていただきます)  
1989年1月 (一般2800円・学生2000円)

昭和62年(1987年)度

鶴田 明子・小林 健一。

昭和63年(1988年)度

鶴田 明子。

平成 元年(1989年)度

大利 昌久・藤井 靖浩・鶴田 忠雄・阿左見正起・福島 彰人・清水 徹男・  
山田三重子・宮園真理子・木村 英二・萱嶋 志門・諏訪 哲夫。

平成 2年(1990年)度

佐藤 幸子・大利 昌久・鶴田 忠雄・阿左見正起。

平成 3年(1991年)度

大利 昌久・鶴田 忠雄。

寄付

談話会有志一同様(24,348円)・萱嶋泉先生の喜寿を祝う会(14,000)。

## 会員移動

(入会)

福島 彰人: 〒010 秋田県秋田市南通築地16-1

清水 徹男: 〒184 東京都小金井市前原町1-6-8

山田三重子: 〒193 東京都八王子市柄田町308-6

宮園真理子: 〒181 東京都三鷹市下連雀7-8-6 有賀ビル501

木村 英二: 〒336 埼玉県浦和市元町2-33-1

萱嶋 志門: 〒191 東京都日野市大坂上3-19-7 (小5)

諏訪 哲夫: 〒243-02 神奈川県厚木市下荻野580

(住所変更等)

吉倉 真: 〒860 熊本県熊本市高平1丁目38番10号 (住居表示変更)

阿左見正起: 〒378 群馬県沼田市上原町1756-68 ひびき荘

加村 隆英: 〒569 大阪府高槻市北園町1-16 青山マンション204

大利 昌久: 〒245 神奈川県横浜市戸塚区名瀬町438-5

鶴田 忠雄: 〒260 千葉県千葉市高浜4-10-2-305

吉田 哉: 〒990 山形県山形市籠田2-7-16

堀越 雅弘: 〒420 静岡県静岡市瀬谷1761-5 西田大坪マンション202

小林 健一: 〒229 神奈川県相模原市大野台4-2-7

小野 展嗣: 〒169 (郵便番号変更)

∴ 元号表示の変更: 新元号公布により昭和64年度以降は平成(元年~)に変更。

---

事務局(会計を含む) 〒221 神奈川県横浜市神奈川区片倉町199 熊田 寂一  
領収証の必要な方は振替用紙通信欄にその旨お書きください。

様

1989.2.4  
池田博明（東京蜘蛛談話会通信担当）

1988年の注目されるクモ トピックス 選定用紙

「東京蜘蛛談話会通信」65号でお知らせしましたように、以前「KISHIDAIA」で行われていたクモ学10大ニュースと同様の企画をしました。1988年に注目された（注目される）クモの事項（分類上、生態上、行動上など）を選定していただきたいと思います。会員中、何人かの方には本用紙をお送りして企画が成り立つように記事を集めたいと思っております。よろしくお願ひします。

なお記述の仕方は、特に厳密なものはありませんが、日時・場所等は正確にお願いします。見出しへクモ名を中心にして下さい。自画自賛でも結構です。10以下でも結構です。なお、選定していただいた項目はすべて記事にいきす所存です。

【記入例】 コガネヒメグモの吐き戻し給餌の映画撮影に成功

日本では吐き戻し給餌が確認された種類は知られていなかったが、新海明氏はコガネヒメグモで給餌例を発見していた。このたび、新海氏はネイチャーシネプロダクションの吉田嗣郎・伊藤浩見氏との共同で、その様子が見事にビデオ・フィルムに収められた。1988年9月×日に静岡県駿東郡小山町須走で撮影に成功。母グモの動きや、子グモの動きが大変によく分かる傑作。（池田記；内容は仮）

【以下、記入のための余白】

## 連載随筆 バイブルのけむり

女郎蜘蛛

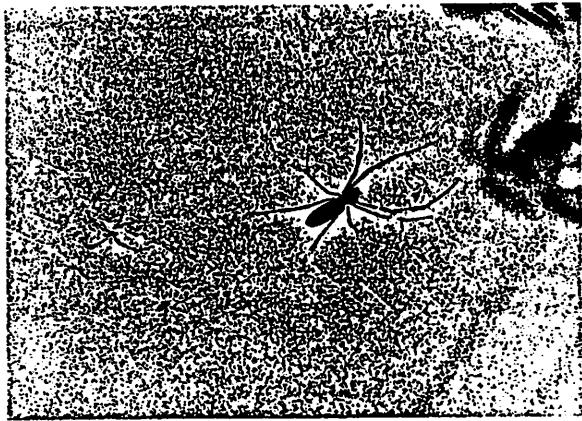
始んど夏らしい夏も無く、残暑らしい残暑も無いうちに秋になつた。昨日から吹き始めた風が昨日も一日吹き荒れて、今朝は八合目辺り迄冠雪した富士山が、まるで突然のように相模湾の上に姿を現した。上空の寒気团が大陸から張り出して来て、日本中の幾つもの高い山が初冠雪を記録した事をTVの朝のニュースが伝えていた。岐阜のオーケストラを指揮しに行って、帰つて来て一日家で音符を書いて過ごし、今度はN響の団友オーケストラと大津に演奏を行つた。帰つて来て、昨日は神奈川県主催のなぎさシンポジュームの基調講演をするために大磯のプリンス・ホテルに行つた。こんな事をしているうちに日本の自然はどんどんと秋に急いでいた。大磯の海の色はもう秋の色だつた。そして吹き止まぬ風に波立ち騒いでいた。帰りに戸塚の汲沢に車を廻して、湘南つり釣センターに岩磯女を貰いに行つた。夕方迄にこの風が收れば、家の下の浜に黒鯛の夜釣りに行ってみようかと思つたのである。

風は夕方になつて收まるどころか、夜に入つて益々強くなつた。釣りは止めにして、孤坐して音符を書いている机の上迄海鳴りが響いて来た。

今朝は晴れて風も止んでいた。遠く雪帽子を被つた富士を海の上に見ながら、小さな筆を持って庭から崖を下りて行つた。筆は落ち葉を掃くためでは無く、この季節には、歩く崖の小径の蜘蛛の巣を拂うために持つのである。蜘蛛は女郎蜘蛛が多く、小径に沿つた紫陽花の茎から、桜の枝から、海桐から、至る處に巣が張り回らされて、このところ旅ばかりしていて崖の小径を歩かなかつた僕を強つ

てゐるような気がする。巣は昨日一昨日の風に破れているものも、風險のために完全なものもあつて、そのいずれの巣の中にも必ず大きな雌が八本の脚を四方に一本ずつ挿えた姿で静止している。哀れ巣に掛かつて餌食となつた小虫の残骸が残つてゐる巣も多い。面白い事に、注意してよく見ると、大きな雌の近くに、三分の一程の、色の淡い、多分雄だろうと思われる個体がじつとしている巣もある

Ph=I.Dan



て、これが雄だとすれば、多分交尾の機会を待つか窺うかしてゐるのではないかと思つ。蜘蛛になった事が無いので何を彼もがよく知らないのだが、想像するに、不意に近寄れば体躯々たる敵つい雌に喰われてしまうので、隙を窺つて巨大な雌に抱き付くか、或いは、雌が許す状態が来て、雌の方から歓迎の信号が出るのを待つてにじり寄るのか、よく

は判らないが、先ずはそんなところだろうと思ふ。この辺には女郎蜘蛛が妙に多くて、中庭に面した僕の書斎の窓の外にも巣が一つ掛かっていて、中庭を掃除する度に取り除こうかと思ったのだが、観察したい気もあったのでその儘にして置いた。その巣には、この間うちから一匹の小さな雄が貼り付いた儘について、その二匹は別に敵意を持つでもなく、一匹ともじつとしているのである。それが昨日の朝、ふと見ると、雄の一匹が雌に極く近くに忍び寄り、一本の脚でそっと雌の頭を触るのを見た。雌は何の反応も示さなかつた。そしてもう一匹の雄も全く動かなかつた。大穢に出掛けなければならない時間が迫つていたので、その後何が起つたかは知らないが、帰つてみると、午後になつてひどくなつた風で巣は破れ、雄も、一匹の雄も、影も形も無かつた。いつも思う事なのだが、こうした虫や小動物が、一体何処からどういう風にして此所に来て、そうして何処に行つてどうなつてしまふのかは、興味はあってもさっぱり判らないものである。この三匹の女郎蜘蛛にしても、風に散つて死んでしまつたのか、どつこい又別な場所に巣を掛けしつかりと生きているのか、さっぱり判りようが無い。どうでも良いと言つてしまえばそれ迄だが、気にし出すと矢張り知りたい気がする。

昔、女郎蜘蛛が出て来る子供の歌を作った事がある。日本の児童文学に優れた著者を残された浜田広介さんに可愛らしい童詩が沢山ある事を知つて、一気に八〇曲を作曲したものの、一つで、「忘れもの」という題だった。その中に女郎蜘蛛が出て来る。



銀の小函の  
忘れもの

さくらの枝に  
わすれたか

夏の河原に  
わすれたか

おもいだされず  
巣にひとり

秋がくれて  
じょろう蜘蛛

という短い童詩だった。

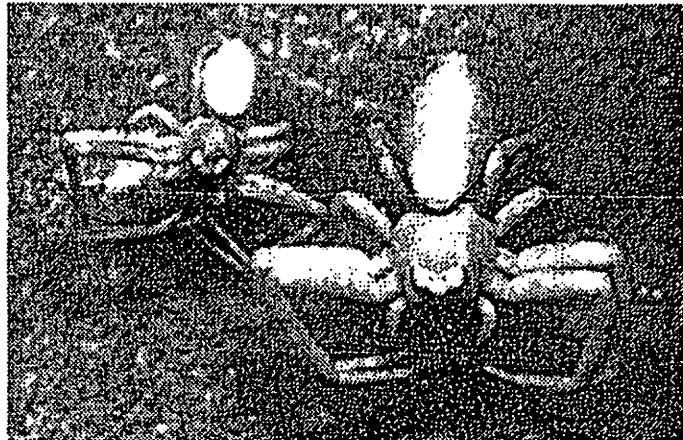
浜田さんの童詩は、童詩の形は執つているが、全く子供に向むところが無いところを好きである。彼は、子供の世界に身を置いて、全く自分の心のために詩を書いた。そして、その姿勢が好きで、僕は同じ姿勢で曲を作つた。この「忘れもの」にしても、最後の蜘蛛が女郎蜘蛛であるところなど、子供にはそぐわないと思う。女郎などの語は、子供の教科書などには無いんだろう。然し、浜田さんにとつては、秋は女郎蜘蛛なのであり、女郎蜘蛛は秋なのであり、僕にとつてもそういうのだから仕方が無い。

この歌は、出版はして残したけれども、格別宣伝する心算も無い儘に放つてあるので、殆んど誰も知らず、殆んど知る人も居ないから、殆んど歌う人も居ない。

秋が益々秋になつて行く。

アサヒグラフ  
1988.10.28 口  
(貞元氏より)

大東島にしか生息しない新種のクモ、ダイトウマルガタワカバグモ



## 大東島にだけ生息

太平洋に浮かぶ孤島、南・北の大東島（沖縄県）で、岡際浦添市勢理村、那覇教育事務所勤務、下謝名松栄さん（四十九歳）が採取したクモが、世界でもこの二つの島にしか生息し

沖縄の  
下謝名さん

ていない新種であることが学會で認められ、ダイトウマルガタワカバグモ（学名・*Loxobates daitoensis*）と名付けられた。下謝名さんは、もしも立派の生物教師で、二十数年

## 新種を発見



下謝名松栄さん

から五十二年にかけ、夏休みを利用して南・北の大東島を防れた際、見つけて持ち帰った。調べた結果、新種ではないかとして五十九年、國立科学博物館動物研究所の小野辰彦博士の生物教師で、二十数年

間わたって鹿児島から宮崎に至る琉球弧といわれる島々を巡ってはクモの採取と調査をしていて「クモ博士」。新種のクモは昭和四十九年

に至る琉球弧といわれる島々に生息していることが確認された。されど、学名の由来は不明である。しかし、下謝名さんが見た類はインドネシア、印度、ビルマなど熱帯地方にい

た博士は日本を選んだ。

毎日新聞(西部版)  
1988.12.6

(小野辰彦)

●専門・小型・軽量機器で、しかも片手でかんたんに



（腰下）  
（腰上）

○○○ 騒をかがせた  
通販専用のチノ入者

東京郊外に住むOJのY子さんは、毎朝超満員の西武バスに乗って通勤している。

先日もいつものように通勤電車に乗り込んだところ、運悪く大柄な四人の男達に囲まれて身動きができなくなってしまった。前後左右が男性の背中である。Y子さんはかろうじて顔を上に向けて、見るともなしに天井を見ていた。

すると四ついたのが、二から三さざれこんだらか一匹のクモ。それが、Y子さんの真上にきて、なんと糸をのばしながら降り始めた。

このままでは頭の上に降りてくる、とY子さんは必死になつてよけようとしたが、運難は増すばかりで、今や手を上げることもできない。ついにクモは目の前に来てしまった。

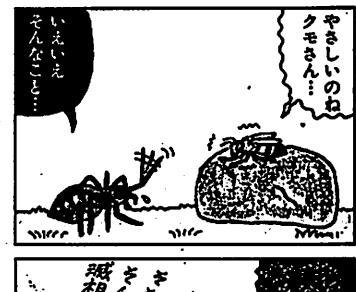
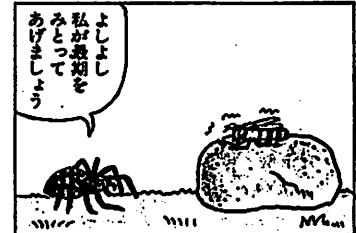
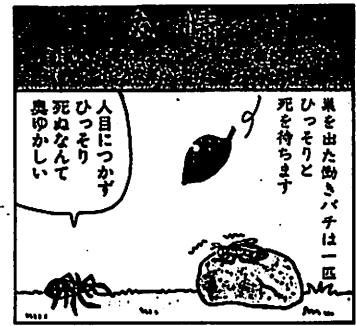
「アマ、アフ、イヤー」

これら切れずにY子さんは悲鳴をあげたが、驚いたのはまわりの男性諸君。いっせいに振り向いた。おかげで、Y子さんは手が動き、クモを払いのけられ、ほつとしたのもつかの間、車内の視線はみなY子さんに集まっている。Y子さん、今度はひたすら床を見つめ、うつむくことになってしまった。



やらと 空飛ぶ大クモがあらわれた!

少年ジャンプ50号(1988)  
「ついでにとしちゃん」  
(板倉氏より)



むしむし博物館 第一回

B.J. 29  
1988.  
(井上氏より)